

方言語彙調査覚書

——兵庫県佐用郡方言語彙の意味分化——

方言語彙には、形態変化と意味変化とがある。

地域により同じ一つのもの（意味）を別のことば（形態・語形）でいうのが形態変化であり、同じことば（形態・語形）を使いながら別のもの（意味）をさしているのが意味変化である。

これに対し、別のものを別のことばで言うのであれば、それは当然のことでは問題にはならない。

本稿で述べるのは、この第三の場合で、何ら問題にはならないことである。が、別のものでありながら、それを同じものと考えていたり、また、同じものでありながら別のものと考えていたりする時には問題になる。

これは一般的には誤解からくるものである。そういう誤りをおこさないための覚書きである。

鎌田良二

たとえば、「山」をヤマと言ひ、「池」をイケと言ひ、「林」をハヤシと言うのは何ら問題にはならない。

ところが、実は「丘」であるのにヤマと言ったり、「池」であるのにヌマと言ったり、「沼」をイケと言ったり、あるいは「湖」をヌマと言ったり、「林」をモリと言ったりすることがある。山と丘、池と沼あるいは湖、林と森とはそれぞれ一応別のものであるはずであるのに、これを同一のものと考えて、同じ語形であるのである。

先に、これを「一般的には誤解からくる」と言ってしまったが、これを単純に「誤解」と言つてはいけないようである。

その土地では、「山」や「丘」のようなものを総称してヤマというのである。「林」も「森」もこのようなものをすべてモ

りというのである。そのようなものの「総称」なのである。

夏目漱石の「坊ちゃん」で、

「なんでバツタなんかおれの床に入れた」

「バツタは何ぞな」

「バツタは是れだ、大きなずう体をしてバツタ知らないだ、

何の事だ」と言うところ……。

「そりやイナゴぞなもし」と生意氣におれをやりこめた。

……………。

とある。坊ちゃん、宿直室で、暗くて、あるいは急いでいたので、バツタとイナゴとを見違えたのか、あるいは、都会人だから、バツタとイナゴの区別がつかなかったのか、バツタやイナゴのようなものをすべてバツタと言うことになつていたのか、とにかく、田舎育ちの中学生にとっては、イナゴのことをバツタということではできないのである。

『日本言語地図』の「里芋」の項では、絵があつて、「これは何と言いますか、茶色の毛が生えていて、煮るとぬるぬるします、いろいろの種類があつて、茎の食べられるものもありますが、ひっくりかへて何と言いますか」とある。

ここに、まず、絵や実物を見せてたずねる方法、これは、虫

や鳥、植物などで最も効果的な方法と考える。『中国五県言語地図』の広戸惇氏は、その鳥の実物を持つて廻つたという話を聞いたことがある。このような時には本稿で以下述べるようなことはおこらない。

次の「茶色の毛が生えていて……」という問い方を「なぞなぞ式」といつている。

これは特に、発音面などを聞くのにもよい方法である。

「なぞなぞ式」に対して、「翻訳式」といつて、共通語でたずねて、それに相当する方言形を求めることがある。どの地域の人も、テレビ・新聞・教科書で、一応、共通語は知っているのである。その上に方言を知っているのであるから、共通語でたずねられても困ることはない。ただ、この場合、両方知っているの、共通語でたずねられると、つい、それにひかれて、共通語の方で答えてしまうことがある。だから、この方法はなるべくさけた方がよい。

また、後でのべるように、ものによつては、共通語と方言とが、一対一の関係でないこともある。

次に、「里芋」で、「いろいろの種類があつて……ひっくりかへて何と言いますか」とある。「里芋」といつこの種類の芋の総称を求めているのである。

『日本言語地図』で「里芋」は、兵庫県北部はズイキイモ、南部はコゾーイモとなっていて、西南部はサトイモとタイモとなっている。

北部と南部との接点に近く、北の但馬に入る養父郡養父町で調査した際、土地の人は、ズイキイモというのは、主茎からまっすぐ下にできたイモで、その主茎から分かれた細い根にできたイモはコイモであるという。これは、大きい方、中心になる方をその総称としてズイキイモということになったのだろうと思う。

瀬戸内海の島で、広島県の瀬戸田では、サツマイモとリュウキュウイモとは別物であって、皮が厚くて黄色い方がサツマイモで、皮が薄くて赤い方をリュウキュウイモということだ。(図一)の地図では、この島はイモとなっているようだから、この二つのイモの総称がイモということになる。他の地域では、この種のイモを、サツマイモというところとリュウキュウイモというところがあるのである。

一般には、同一物と思っているものが、地域によって、それぞれ別物と考え、別の名がつけられていることがある。これを意味の分化と考えると、次のような場合があると考えられる。

(1) A・Bと分かれていて、その総称として、Cという方

言形がある場合。

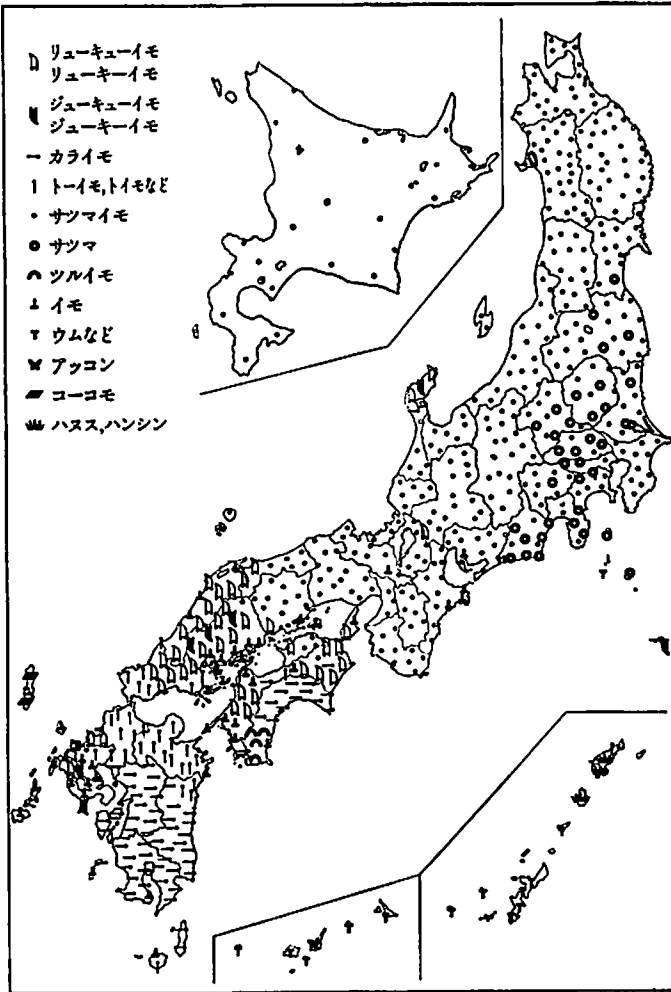
(2) A・Bと分かれているが、Aの方が生産量が多いとか、日常よく使用するか、何らかの理由で優勢な立場にあるので、総称としてはAを用いるという場合。

(3) A・Bと二つに分かれていて、これは別物と考えているから、総称はないが、あえていうなら、共通語形で言うことになるという場合。そして、この共通語形は、よそことばと考えている場合と、この共通語形は割合、よく使われるようになってきているという場合。などがあると考えられる。

「糸」をイトと言うか、エトと言うかを調べるため、糸巻きに巻いた「糸」の絵を指さして「これを何と言いますか」とたずねたところ「これは木綿ですか、絹ですか」と言われた、「木綿糸」ならモメンで、「絹糸」ならキヌと言ひ、「糸」を買いに行くときも、「モメン下さい」とか、「キヌ下さい」とか言ひて買うので、「イト」は日常語ではないという地域がある、ということを知ることがある。

このように、A・Bと意味が分化するのは、一般的に言って、そのものの生産量が多いとか、そのものが豊富な地域でおこる

さつまいも (甘藷)



(図1)

徳川宗賢編『日本の方言地図』より

ことである。

日本では雨がよく降るし、季節の変化もさかんであるので、雨に関する語彙が多く、ユグチ、シグレ、サミグレなどまかく分かれているというのと同じである。

ただ、次のようなこともある。兵庫県佐用郡で、「夕立」「雷」「稲妻」について調査したとき、「ヨグチ（夕立）が降る」「ヨグチが鳴る」「ヨグチが光った」と、この三つをすべてヨグチという一語ですますということである。佐用郡は山地であるので、夕立・雷・稲妻が盛んである。あまりよく降り、鳴り、光るので、そして、この三つは、殆ど同時におこるので、三つをいっしょにしてみました(注)のかと思われる。

意味分化している場合も、広範囲の日本全国の地図を書くには、その総称を求めて書くしかない。「なぞなぞ式」でその総称を求めると、先の(1)の場合にはCと答え、(2)の場合にはAと答え、(3)の場合には、共通語で答えるであろう、この(3)の場合の共通語が、どの程度に意識しているかが問題であろう。どの程度に日常語、生活語と考えているかである。

また、先の広島県瀬戸田で、甘藷のことを「なぞなぞ式」で

たずねた時、或る人は赤い皮のことを思つてリュウキューイモと答え、また、或る人は、黄色の皮の方のことを思つてサツマイモと答えているということがないかと恐れるのである。

私の失敗例で言えば、「酒樽の栓」について兵庫県佐用郡でたずねていたところ、四地点目ぐらになつて、「それは上の栓ですか下の栓ですか」と逆にたずねられた、われわれは当然、下の栓を意識していたのであるが、それまで聞いてきた三地点では、どちらのことを考えて答えてくれたのか、こちらが規定していなかったので失敗してしまつたのである。この辺りでは、上の栓はツメ、下の栓はセチベン、または、セツベンであつたのである。一般の消費者は下の栓を考えがちで、自分の立場だけで考えていたための失敗である。

昭和五十九年七月、兵庫県と岡山県との県境近くの兵庫県佐用郡佐用町・南光町・上月町で次のようなことを試みた。

しかし、以下の記述は、今までの「言語地図」が誤つていないものではない。決してそのようなことは考えていない。また、ここで言っている「言語地図」とは「日本語地図」と限つたものではない、その殆どは、それ以外の地図である。

また、同じ佐用町でも、地点が異れば以下の記述があつて

いないこともあろうし、述べていることの逆のこともあろう。

ここで言う佐用町とは佐用町山田で、南光町は真盛、上月町は力万の部落である。

調査に出かけるとき、今までの「言語地図」から、この付近で使われている方言形をぬき出し、これをこの辺りの予想語形とした。先にも記したように、どの地域の人も一応、共通語形も知っているのだから、「なぞなぞ式」でたずねても、「翻訳式」でたずねても、うっかり共通語形を言わないとも限らない。もっとも、それをうまく方言形で答えるようにもっていくことが大切なのではあるまいか。そこで、もし、共通語形で答えた場合に準備した予想語形をもち出し、こうとも言いませんかと、と言うと、「ああ、そうそう、その方が自然な言い方です」などと言うことがある。

即ち、Aという答えを得た後、さらに、予想語形のBとは言いませんかと念のためににずねるのである。

「毛虫」で、ケムシという答えを得たので「言語地図」にある形の「ヤマタローとは言いませんか」とたずねると、ケムシが総称で、ヤマタローは特に毒をもった大きいものであるとい

う答えであった。(佐用)

「女郎ぐも」で、ジョロークモは黄色いクモで、予想語形のオニグモは黒いクモである。(佐用)

「ふくろうの鳴き声」で、ボーズコイボーズコイは「縁起の悪い時」の鳴き声で、これに対して、ノリツケホーセは洗濯して、糊をつけて干せの意味だから、明日は天気がよいというときのものであると言う。その時々で別であるという。(佐用)

くり返し記しておくが、これは「言語地図」が誤っているのではなく、それが、いくら佐用町の近くであっても、また、佐用町内であっても別の地点では、「毛虫」の総称が、その時点においてヤマタローであったのであろう。また、その「言語地図」の調査の時には、「女郎ぐも」の総称がオニグモであったのであろう。

ただ、調査の際には、どんなたずね方をするにしても、よく注意してかからないといけないと自分の反省の一端を述べるとともに、佐用郡ではこのように意味が分化しているということを記す覚書きである。

「青い大型とんぼ」は、「青い」と限定しているから間違う

ことはないが、この辺りに「言語地図」で、オオトンボとオニヤンマとあるが、佐用町山田では「青い」方はオオトンボで、オニヤンマというのは「黒い」方であるという。(佐用)

「こおろぎ」で、ギスというのがあるが、これは、白い虫で別のものであるという。(佐用)

「さなぎ」で、ビビというのは、蚕のさなぎに限るといふ。

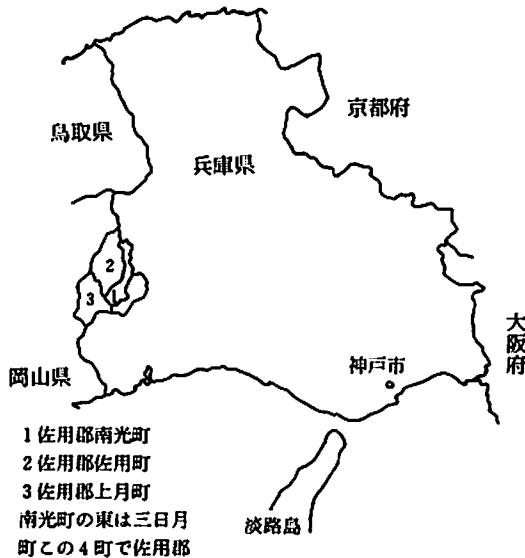
(佐用)

「湯気」は、『日本言語地図』では、「湯の場合」と「飯の場合」とに分けている。佐用町山田では、「湯の場合」はユゲ、「飯の場合や寒い時、口から出る」のはホゲという。(佐用)

「荷札」は佐用町山田ではエフであるが、上月町力万ではヒビロは古い言い方であるという。そして、佐用町山田ではヒビロという形は、メモのように何月何日何をするを書いて家々に配るものであるという。

「無賃労働」のことを「言語地図」で、デゴトというのがあるが、これは、当然の義務として働く場合である。損をしたという気持が入ったときはタダバタラキであるという(佐用)

「電」でアラレというのは小さく。大きいのはヒョー(電)といい、その中間はトチという。佐用町では、ヒョーが降ると牛の背の皮をむくと言ひ、農作物が完全にだめになるといふ。



(図2)

(佐用)

「舌」は一般的にはシタで、「言語地図」にペロとあるが、上月町力万では、ペロは幼児語としてしか使わないということである。(上月)

「植物が自生すること」で、アダバエというのは、草が自然に生えることで、本来、畑で作るべきものが自生するときはステバエという。(上月)

今まで、断つたものも断らなかつたものも、先に記したように、上の見出しで、下に記した方言形は「言語地図」で佐用郡やこの付近に記された語形である。以下も同様である。

「おおばこ」で、オオバコは、まるい葉をしている。ヒヨコグサとは別物である。(上月)

「ひがなばな」は、一般にはシブラバナで、それが大きくなるとシプトバナといい、これは根を切つて糊にするという。

(佐用)

「落葉」で、庭に落ちた葉はオチバで、山の落葉はコクバという。(佐用)

「稲架」稲架全体をイナキと言ひ、その一本をハゼという。

(上月)

「餡の入った餅」「あん」が内に入っているのはアンモチで、

アンコロというのは外にあんをつけたものである。(上月)

「箆」サルというのは小さいもので、その大きいのはソーキという。これは野菜や米を洗う目が小さく平たいものである。フゴは竹で編んだ底の深いものである。(上月)

「蝶」一般にはチヨーまたはチヨーチヨーで、チヨーチヨーは幼児語である。(上月)

「熊蜂」は一般にはダンゴバチであつて、赤色をしたのがアカニカ、赤黒いのはクロニカという。クロニカはダンゴバチよりも体長が長く、きつくてこれにさされると人が死ぬこともある。(佐用)

「沢山」で、「仰山」からでたと思われるヨーサンが一般的で、それより多い感じでポッコーという。(南光)

「分家」佐用町山田では、「分家」のことをシntaxクというのとワカレヤというのと両方があるが、この区別ははっきりとは定義しにくいが、感覚的に分けているという。これに対して、上月町力万では同一部落内で世帯を別にしたものはベツケというとのことであつた。

以上、「言語地図」で、佐用郡の近くに出てくる形を予想語形として、これこれと言ひませんかという問いかけについて

得た答えの一端を示したものである。

佐用町山田は七十才代、上月町・南光町は六十才代の人に聞いた結果である。こういうことは一般的に年令差（時代差）が大きくひびくものであろう。

「ご飯を入れるオヒツ」を、上月町で一般にはオヒツであるが、これをハンボというのは上流家庭であると言っていた。他の地点でハンボは底が浅く、オヒツは底が深いとも言っていた。上月町で、同一物を一般と上流とでは言い方が変わるのであれば、これはことばの新しい、古いの違いかもしれない。上流家庭では中央の、より文化的中心地から入って来た新しい言い方を使っているのかもしれないし、また反対に、上流家庭では古いしきたりを守るように古い言い方を大切にしているのかもしれない。このようなことをよく調べるのもおもしろいことだと思つた。

『日本語地図』のように、考えに考えた結果の「なぞなぞ式」ならよいが、ほんの思いつきの「なぞなぞ式」では相手を迷わすことになり誤つた答えを得ることになるかもしれない、よく注意しなければならぬことである。

(注) 拙稿「兵庫県佐用郡方言の『夕立・雷・稲妻』について」
(甲南女子大学研究紀要 一八)